

「どっちでもいい」と人間関係

森 永 康 子

Summary

"Docchi demo ii" (or "Either is OK with me") and personal relationships
of women college students in Japan.

Yasuko MORINAGA

"Docchi demo ii" (or "Either is OK with me") is commonly heard when two or more people in Japanese society are trying to reach a decision together. In order to investigate the role played by "Docchi demo ii" in the personal relationships of women college students, two open-ended questionnaires were administered to a sample of this population. It was found that "Docchi demo ii" was mainly used among friends in eating and leisure situations, such as agreeing on a place to eat, what to eat, a place to meet, and things to do for fun. Although subjects in most cases showed positive attitudes toward the decisions made by either their friends or themselves, some students described feeling annoyed when they were forced to take responsibility for making the decision. "Docchi demo ii" was used even when they had definite preferences. The role "Docchi demo ii" plays in personal relationships was discussed in the context of Japanese culture as characterized by collectivism (Triandis, 1995) and the interdependent self (Markus & Kitayama, 1991).

対人関係において、何かを決定する場面で、「どっちでもいい」「何でもいい」「どこでもいい」というような判断を他者に譲る表現をよく耳にする。この言葉は実際にどのような状況で使われ、どのような機能を持っているのだろうか。その手掛かりを得るため、女子大学生を対象に自由記述による調査を行った。このような検討を通して、日本の人間関係のあり方について考察したい。

調 査 I

目 的

調査Ⅰでは、「どっちでもいい」に類する言葉がどのような関係の中で使われ、個人にどのような反応をもたらすのかを、まず、回答者が「どっちでもいい」に類する言葉を使った状況を取りあげて検討する。

方 法

調査対象者：女子大学生1年生151名。調査時期1998年6月。授業を利用して一斉に調査を行った。

調査項目：①使用の有無：まず、以下のような教示を用い、最近「どっちでもいい」「何でもいい」「どこでもいい」というような言葉を使ったことがあるかどうかを尋ねた。

最近、「どっちでもいい」「どれでもいい」「どこでもいい」「何でもいい」というような言葉を使ったり、そう思ったりしたことがありますか。

②使われた状況：上の質問に「ある」と回答した者に対してのみ、以下のような教示と回答例を示し、使用された状況についての記述を求めた。

「ある」と答えた人にお聞きします。それは、どのような状況だったのでしょうか？できるだけ具体的に書いて下さい。例えば、誰といるとき(何人ぐらいで、友人、知人、親、先輩、後輩と一緒にいる時、あるいは一人でいる時など)、どこにいるとき、何を決めるときだったかなどを思い出せる限り詳しく書いて下さい。回答例を2つあげてますが、皆さんの回答は一つの状況のみについて結構です。

回答の例①：テニスのサークルに入っているが、先日、神戸で試合をした。その試合は午後4時頃終わり、サークルの先輩の2回生1人と同級生の1回生4人(全員女性)で、喫茶店に入って反省会をしようということになった。試合会場のすぐそばには2つの喫茶店があったが、このどちらかに入るか、三宮まで帰っていつもよく使っている喫茶店に入ろうか、どうしようかということになった。先輩に「どうする？」と聞かれ、「どっちでもいいです」と言った。

回答の例②：高校1年生からの友人(女性)が、四国から遊びに来ることになった。電話で、待ち合わせ場所を決めるのに、「どこがいい？」と聞かれ、「どこでもいいよ」

と答えた。その友達とは、高校1年の時、同じクラスになってからずっと仲が良く、高校生の時はよくいっしょに遊んでいた。

③使われた後の状況：「どっちでもいい」に類する言葉を使った状況がその後どのようなようになったかを、以下のような教示と回答例を示し、記述を求めた。

結局、どのようにになりましたか？

回答の例①：1回生は、全員「どちらでもいいです」みたいなことを言ったので、先輩が「じゃあ、ここの喫茶店でもいい？」と聞いた。1回生はうなずいたので、試合会場のすぐそばにあった2つの喫茶店のうち、新しそうな方に皆で入った。

回答の例②：友人はこちらへは来たことがなく「私は全然地理がわからないから、よくわかることを決めてよ」と言われ、大阪まで新幹線で来ると言ったので、自分がよく友達と待ち合わせに使う阪急梅田のビッグマンのところで待ち合わせることにした。

④考えたこと：このような状況でどのようなことを考えたり、感じたりしたかを、以下のような教示と回答例を示し、記述を求めた。

その時、あなたはどのように感じましたか？

回答の例①：おなががすいていたので、どうしようかと皆で言っていた時は、いらいらしてどっちでもいいから誰か早く決めてよと思っていたが、決まったのでほっとした。本当は、三宮まで行った方が家に帰るのが便利でいいのに、と思っていたが、他の1回生が何も言わなかったので、私も何も言えなかった。でも、入った喫茶店は、値段の割においしかったのでよかった。

回答の例②：電話を切った後、梅田でよかったのかなと不安になった。自分の友達はよく知っているが、初めて大阪に来る人にわかるだろうか、迷子になったらどうしようかと気になった。新幹線のホームまで迎えに行った方がよかったかなと思った。

結 果

調査対象151名のうち「どっちでもいい」に類した言葉を最近使ったことがあると回答した者は122名（80.8%）であり、多くの学生がこうした言葉を使っていることがうかがえる。なお、最近使ったことがあると回答した者の中の10名は、恒常的に「どっちでもいい」を使う状況を記述したもの（回答例：友人3～4人と遊びに行くときはいつも「どっちでもいい」「何でもいい」と言います）などであり、これらを除いた112名を以下の検討対象とした。

「どっちでもいい」が使われた状況

まず、誰と一緒にいたかという点から自由記述の内容を分類した。分類は記述内容にもとづいて筆者が行った。その結果、一緒にいた人は「友人」71名（112名中の63.4%）、「家族・親戚」24名（同21.4%）、「彼」6名（同5.3%）、「その他（クラブの先輩、後輩など）」11名（同9.8%）であった。「友人」の中には記述内容から「彼」と推測できるようなものもあったが、回答者自身の記述に従い、「友人」に分類した。以上のようなことから、「どっちでもいい」

に類する言葉は、友人といる場合にもっともよく使われることが推測できる。そこで、以下は、「友人」に分類された回答（71名）について考えてみた。なお、友人の場合、友人と二人でいる場合が42名（友人と回答した71名中の59.2%）、三人以上の場合が28名（同39.4%）、不明が1名であった。

女子大学生が友人に対して「どっちでもいい」を使うのは、何を決定する時であろうか。分類の結果、もっとも多かったのが、食べ物に関する状況（食べる食べない、何を食べるか、どこで食べるかなど）であった（36名、71名中の50.7%）。次に多いのが、遊び場所や時間に関するもの（どこで遊ぶか、映画かカラオケかなど）であった（19名、同26.8%）。

「どっちでもいい」が使われた後の状況

友人と一緒にいるところで「どっちでもいい」に類する言葉を使った後どのような状況になったのかについての回答は、誰が決定を下したかという点から分類を行った。その結果、決定を下したのは友人が26名（71名中の36.6%）、自分が11名（同15.5%）だった。なお、回答の中には友人が提案して自分が了承したという回答も含まれており、この場合は決定者は友人とした。特に誰が決めたという記述のなかった者や何となく決まったという回答が21名（同29.6%）であった。ジャンケンで決めた者が4名いたが、このような状況に陥ったときのルールとしてジャンケンで決めることにしているという。さらに、未だに決まっていないという回答もあった（どのサークルに入るか）。

「どっちでもいい」が使われた時の個人の心理的反応

「どっちでもいい」を使った時、個人はどのようなことを考えたのであろうか。これは、質問④「その時、あなたはどのように感じましたか」という質問に関して、まず、どっちでもいい状況が決着のついた後、決まった事柄に対してどのような記述がなされているかに注目した。決まった事柄について記述のあった回答は、52名であった。

この52名の回答について、まず、筆者が回答内容にすべて目を通した後、記述内容が肯定的か否定的か、誰のことにに関して記述されているかという2つの観点から以下のような分類基準（1）（2）を設けた。

分類基準（1）記述内容が肯定的か否定的か

- ①積極的な肯定的記述（例：…してよかった。満足できた。楽しかった。）
- ②消極的な肯定的記述（例：不快には思わなかった。嫌ではなかった。）
- ③否定的記述（例：不安だった。そこでいいのかなと思った。不満を感じた。…すれ
ばよかった。）
- ④肯定・否定の両方が含まれている記述
- ⑤その他（肯定や否定が入っていないもの、分類できないもの）（例：何も思わなかった。）

分類基準（２）誰について記述しているか

- ①自分の考えたことや思ったことや感じたこと（例：満足した。楽しかった。不快ではなかった。何も思わなかった。）
- ②友人についての言及や友人の思っていることの推測（例：友人が満足した。友人は…だったのでかわいそうだった。）
- ③自分と友人の両方が含まれているもの
- ④その他

この基準を基に、心理学専攻の大学院生１名に回答の分類を求めた。筆者があらかじめ分類していたものと一致したのは52名中の46名分であり、一致率は88.5%であった。このことより、先に設定した分類基準は妥当であると考えられるので、以下は筆者の分類した回答に基づいて検討した。

表１に、分類した度数を示した。なお、最終的には、上述の分類基準の「（１）記述内容が肯定的か否定的か」において「①積極的な肯定」と「②消極的な肯定」を合わせて「肯定的記述」とまとめた。

表１ 決まった事柄についての記述内容の分類

	自分のこと	友人のこと	両方が含まれたもの	その他	計
肯定的記述	30	0	1	0	31
否定的記述	8	2	1	0	11
両方が含まれたもの	3	0	4	0	7
その他	3	0	0	0	3
計	44	2	6	0	52

表１より、自分のことに関する肯定的記述が多かったことが示された。つまり、決まった内容に関して、多くの場合は満足を感じるあるいは不満を感じないと考えられる。

次に、なぜ「どっちでもいい」に類する言葉を使ったのかについて考えてみたい。これは、主に④「その時、あなたはどのように感じましたか」という質問に対する回答の中で、この言葉を使った理由を述べてあるもの27名の回答を検討の対象とした。まず、これについても筆者が全体の回答に目を通した上で、以下のような分類基準（３）を設定した。１つの回答の中に、分類基準のカテゴリー２つ以上に当てはまる記述があった場合には、すべてのカテゴリーを用いた。例えば、「私はどちらでもよかったので、友達が食べたいものを書いてくれればよかったのと思った」は、次の①③という２つのカテゴリーにあてはまるものと見なした。

分類基準（３）「どっちでもいい」を使った理由

- ①本当にどちらでもいい、何でもいい、どこでもいいと思った
- ②本当は希望があった
- ③友人に主導権を譲ろうと思った（例：友人に合わせよう。任せよう。決めてほしい。好きにすればいい。）
- ④遠慮した
- ⑤決めるのにふさわしい人がいた（例：車の運転をしている人。）

この基準を基に、大学院生１名に回答の分類を求めたところ、筆者があらかじめ分類していたものと一致したのは27名中の25名分であり、一致率は92.6%であったので、以下は筆者の分類した回答に基づいて検討した。「本当にどちらでもよかった」とする者は11名（27名中の40.7%）、「本当は希望があった」とする者は8名（同29.6%）であった。この希望のあった8名のうち、「遠慮した」者は4名、「友人に主導権を譲ろうと思った」者は3名であった。本当にどっちでもよかったのかあるいは本当は希望があったのか明記されていないが、「友人に譲ろうと思った」という回答が5名（同18.5%）あった。「決めるのにふさわしい人がいた」というのは2名（同7.4%）であった。このことから、調査対象となった女子大学生が「どっちでもいい」と言う場合、本当にどっちでもいいと思っているのはおおよそ半数の状況であり、本当は希望があっても遠慮したり友人に譲ろうとしている場合も多いことが推測できる。

以上の他に、「その時、あなたはどのように感じましたか」という設問に対する回答の中には、決まった事柄に対する記述ではなく、「どっちでもいい」と言ったときの自分の考えや心情について言及してある記述があった。これは、「一緒にいるのが楽しいので、食べるところはどこでもよかった」というような内容（5名）、「友達とどれもこれもおいしそうとか言いあっているのが楽しかった」（1名）、「最近、『どっちでもいい』とか『何でもいい』という言葉が自分がよく使うことに気づいていて、自分でも嫌だなと思っていたのに、また使ってしまったと思った」（1名）、あるいは、友人もどこでもいいと言ったりあるいは何も意見を言わないので「いらいらした」（4名）、といったことである。

ところで、これらの回答について、決定を下したのが友人か自分かで分けて考えると、友人が決定したという場合（26名の回答）には、決まった事柄について（分類基準の（１））、肯定的な記述が見られたもの15名（26名中の57.7%）、否定的な記述が見られたもの5名（同19.2%）、両方の記述が見られたものが4名（同15.4%）だった。両方の記述が見られたもの4名の内の2名を除くとすべて自分についての言及であった。

決定を下したのが、自分の場合（11名の回答）には、決まった事柄に関して記述内容に肯定的なものがあつたのは2名、記述内容に否定的なものが含まれているものが2名、両方が含まれたものが2名だった。これらの6名の内の4名は友人に言及した記述が見られた。さらに、友人が決定を下した時の記述には見られなかったものとして、「いらいらした」という表現があつたもの3名、「どっちでもいい」という言葉をまた使ってしまったという後悔の記述がさ

れていたものが1名あった。

検討対象となる人数が少ないため明確ではないが、友人が決めた場合と自分が決めた場合を比べると、自分が決めた場合の方が否定的な記述が多く見られ、自分が決めねばならない状況に陥ると不安を感じたり、いらいらしたり、また、友人がどのように思っているかを気にする、ということが言えるのではないだろうか。

考 察

調査Ⅰの結果から、女子大学生の多くが「どっちでもいい」「どこでもいい」「何でもいい」というような判断を他者に任せる言葉をよく使っていることが示された。そして、それは友人という時にもっとも多く使われているようである。自由記述の内容から、「どっちでもいい」に類する言葉が使われるのは、本当にどっちでもいいと思った場合、本当は希望があったが友人に決定権を譲ろうとした場合や遠慮した場合などに分けることできた。本当にどっちでもいい場合には、友人に会うことが目的でそのためにどこに行くかを決める時のように、「どっちでもいい」こと自体は重要ではない場合もあるようだ。この場合には、なかなか決着がつかなくてもそれほど問題ではないのかもしれない。

また、決定された事柄に関しては、おおむね満足を感じるようだが、誰が決めたかとその時の反応の分類から、「どっちでもいい」というのは友人が決めると多くの場合満足するが、自分が決めなくてはならないと不満や不安を感じるようになることがうかがえた。

調 査 Ⅱ

目 的

調査Ⅰでは、友人から聞かれて回答者が「どっちでもいい」という言葉を使った状況に焦点を当てたが、調査Ⅱでは、回答者が尋ね他者から「どっちでもいい」に類する言葉を返された状況を取り上げた。

方 法

調査対象者：女子大学生1年生146名。調査時期1999年6月。授業を利用して一斉に調査を行った。

調査項目：調査Ⅰに準じ、まず、①最近「どっちでもいい」「何でもいい」「どこでもいい」というような言葉を一緒にいる人から使われたり、耳にしたことがあるかをどうかを尋ね、「ある」と回答した者に対してのみ、以下のような点について自由記述で回答を求めた：②使われた状況、③使われた後の状況、④考えたこと。教示や回答例については調査Ⅰで使用したものを表現を修正し用いた。

結 果

調査対象146名のうち、14名は自分が「どっちでもいい」と言った状況を回答していた。こ

れを除いた132名のうち、最近こうした言葉が使われたり耳にしたりしたことがないとした者は22名であり、110名すなわち83.3%の学生が最近「どっちでもいい」に類する言葉を耳にしていた。このように、多くの学生がこうした言葉に触れていることがわかる。なお、この110名のうち、自分が尋ね一緒にいた人が「どっちでもいい」という言葉を使ったという状況について記述されていた81名を以下の検討の対象とした。対象から外したものの多くは、いっしょにいた人のだれかが「どうする」と尋ね、他の人が「どっちでもいい」と答えたという状況についての回答であった。なお、記述内容の検討にあたっては、調査Ⅰと同様の方法を用いた。

「どっちでもいい」が使われた状況

調査Ⅰと同様、まず、誰と一緒にいたかという点から自由記述の内容を分類した。分類は記述内容にもとづいて筆者が行った。その結果、一緒にいた人は「友人」69名(81名中の85.2%)、「家族・親戚」8名(同9.9%)、「彼」2名(同2.5%)、「クラブの先輩」1名(同1.2%)、記述のないもの1名(同1.2%)であった。「友人」の中には記述内容から「彼」と推測できるようなものもあったが、回答者自身の記述に従い、「友人」に分類した。このように、自分が使われる状況においても、調査Ⅰと同様、一緒にいた相手は友人が多いので、以下の検討対象は友人の場合に限ることにした。なお、友人の場合、友人と二人でいる場合が56名(友人と回答した69名中の81.2%)、三人以上の場合が15名(同21.7%)であった。

女子大学生が友人から「どっちでもいい」と言われるのは、何を決定する時であろうか。分類の結果、もっとも多かったのが、調査Ⅰと同様、食べ物に関する状況(食べる食べない、何を食べるか、どこで食べるかなど)であった(32名、69名中の46.4%)。次に多いのが、遊び場所や時間に関するもの(どこで遊ぶか、映画かカラオケかなど)であった(23名、同33.3%)。

「どっちでもいい」が使われた後の状況

「どっちでもいい」が使われたとき誰が決定を下したかという点から分類を行ったところ、自分が決定したというものが26名(69名中の37.7%)、友人が5名(同7.2%)だった。特に誰が決めたという記述のなかった者や何となく決まったという回答が36名(同52.1%)であった。また、ジャンケンで決めた者が2名いた。調査Ⅰに比べると、自分が決定したという回答が増え、友人が決めたという回答が減っているが、これは、調査Ⅰでは、友人が「どうする?」と尋ね回答者が「どっちでもいい」と答えたため、先に尋ねた友人が決断を下すという状況が多く、調査Ⅱでは、逆に、回答者が尋ね友人が「どっちでもいい」と答えたため回答者が決めるという状況が多かったためであろう。

「どっちでもいい」が使われた時の個人の心理的反応

友人から「どっちでもいい」と言われたとき、個人はどのようなことを考えたのであろうか。調査Ⅰと同様、質問④「その時、あなたはどのように感じましたか」という質問に関して、決まった事柄に対してどのような記述がなされているかについて検討した。決まった事柄につい

て記述のあった回答は、48名であった。この48名の回答について、調査Ⅰで使用した分類基準（１）（２）を基に、次のような基準（４）（５）を作成し、心理学専攻の大学院生１名に回答の分類を求めた。

分類基準（４）記述内容が肯定的か否定的か

- ①積極的肯定及び消極的肯定
- ②否定的及び否定的なニュアンスの入っているもの
- ③両方が含まれたもの
- ④その他

分類基準（５）誰について記述しているか

- ①自分の考えたことや思ったことや感じたこと
- ②友人についての言及や友人の思っていることの推測
- ③両方が含まれたもの
- ④その他

あらかじめ筆者が行った分類と一致したものは、48名中の44名分の回答であり、一致率は91.7%であったことから、分類基準は妥当であると判断し、以下は筆者の分類結果に基づいて検討した。表２に分類結果を示した。

表２ 決まった事柄についての記述内容の分類

	自分のこと	友人のこと	両方が含まれたもの	その他	計
肯定的記述	22	0	1	0	23
否定的記述	4	0	2	0	6
両方が含まれたもの	5	0	6	0	11
その他	8	0	0	0	8
計	39	0	9	0	48

表２より、調査Ⅰと同様、自分のことに関する肯定的記述が多く、決まった内容に関しては多くの場合満足を示すあるいは不満を感じないことが伺われた。

友人が決めたという回答が５名と少なかったため、調査Ⅰで行ったような、決めたのが自分か友人かによる違いは検討できなかったが、自分で決めたという場合（26名）には、決めた事柄に関して、記述内容が肯定的であったもの５名、否定的なものが含まれているものは３名、両方の気持ちが含まれていたもの３名であった。これらの11名の中で友人に言及したものは、５名であった。

次に、友人から「どっちでもいい」という言葉を引きだしたことに関しての記述があったものについて考えてみたい。これは、主に「その時、あなたはどのように感じましたか」という質問に対する回答の中で、友人から「どっちでもいい」という言葉を引きだすような質問をした理由を述べてあるもの28名の回答を検討の対象とした。まず、これについても筆者が全体の回答に目を通した上で、以下のような分類基準（6）を設定した。この基準に関しても1つの回答の中に2つ以上のカテゴリーに当てはまるものがあれば、すべてのカテゴリーを当てはめた。

分類基準（6）「どっちでもいい」という言葉を引きだすような質問をした理由

- ①自分もどちらでもいいと思っていた、希望がなかった
- ②本当は希望があった
- ③友人に主導権を譲ろうと思った
- ④遠慮した
- ⑤友人の意見を参考にしようと思った
- ⑥一応尋ねてはいるが、だいたいこうなるだろうという予測があった
- ⑦その他あるいは以上のようなことが書いてないもの

この基準に従い大学院生に回答の分類を求めたところ、筆者の行った分類と一致したのは28名中の24名であり、一致率は85.7%であったので、これまでと同様、筆者の分類に基づいて回答を検討した。カテゴリーに分類したものの中で、「本当にどちらでもよかった」とする者は、10名（28名中の35.7%）、本当は希望があったとする者は10名（同35.7%）であった。調査Ⅰでは、このような希望があった者のうち遠慮した者や友人に主導権を譲ろうとした者がいたが、調査Ⅱにおいてはそのような回答は見られなかった。これ以外の回答には、こうなるだろうという予測はあったが一応聞いてみたという回答が3名、友人に決定権を譲ろうとしたものが5名であり、この5名のうちの2名が遠慮して譲ろうとしたと分類できた。

このような回答以外に、友人から「どっちでもいい」と言われたときの反応として回答されていたものには、「質問に対していいかげんに取られているのかな？と思うこともある」「少しでも相手の意に沿いたいと思うので、相手の心の内をあれこれと想像してしまい、疲れるし、イライラする」「本当に私が決めたことを心から喜んでいるのか不安になる」「はっきり言ってキレた」「『何でもいい』やったらわからんてー。と思った」「私が主導権を握っているようで嫌だなと思う」という記述があった（合わせて6名）。

考 察

調査Ⅰは回答者が「どっちでもいい」という言葉を使った状況を尋ね、調査Ⅱでは他者から「どっちでもいい」という言葉を引きだした状況を尋ねた。いずれの場合も友人との関係で使われることが多く、「どっちでもいい」に類する言葉は、友人との対等な関係で使われること

が多いようである。しかし、調査対象である女子大学生は1年生で、しかも6月という調査時期のために、上下関係のあるクラブやサークルなどにまだあまり所属しておらず、結果的に友人とのつきあいが多くあげられたのかもしれない。上下関係がある場合は、今回の回答とは異なった反応が見られることも考えられる。この点については今後の検討が必要であろう。

また、「どっちでもいい」が使われる場面は、多くの場合、何を食べるかやどこで遊ぶかといったような食べ物や遊びに関するものであった。女子大学生の友人とのつきあいは、このような状況で行われるのであろう。「どっちでもいい」状況に決着をつける人は、先に「どうする」と問いかけた人であることが多い。これは、問いかけることそのものが友人との関係においてリーダーシップを発揮していることを意味するためかもしれない。また、決まった事柄については、おおむね満足すること、少なくとも不満はあまり抱かないことが示された。これは、決定すべきことが食べることや遊び場所に関するものが多いので、あまり真剣に悩むようなものではないことを意味しているのだらう。

「どっちでもいい」をめぐるのは、「どっちでもいい」と言う者も、言われる者も、何らかの希望やこうなるだろうという予測を持っている場合も多いようだ。では、なぜこのようなことを言うのだろうか。これは、本調査の回答から、遠慮や主導権を友人に譲ろうとするためであるとも考えられる。しかし、同時に、相手からの否定的な評価を避けようという動機もそこにあるのではないかと推測できる。つまり自分が決めることや決めた内容そのものが他者からどのように評価されるのかを気にし、他者に意見を求めたり他者に判断を譲ろうとするということも考えられる。このことは、数は少ないながらも、自分が決めた場合「これでよかったのだらうかと思った」という内容の記述をした学生がいたことから推測できよう。

一方、「どっちでもいい」は会話のひとつの流れとも言えるかもしれない。友人と相談するつまり友人との会話によって、対人関係が円滑になるということが考えられる。しかしながら、「どっちでもいい」と言う相手に「イライラした」といった否定的な感情を持つという回答も見られ、必ずしもこの言葉が友人との関係をスムーズにするものではないという負の側面もうかがえる。

総合的考察

本研究は、「どっちでもいい」という言葉をめぐって、日本の人間関係について考察することが主な目的であった。

集団主義 (collectivism; e.g., Triandis, 1995)、相互依存的自己 (interdependent self; e.g., Markus & Kitayama, 1991) などという点から、日本の文化的な特徴がさまざまに述べられているが、そこに共通するのは自己定義において人間関係の占める割合が高いということであろう。個人よりも集団や人間関係を重視する社会では、「出る杭は打たれる」に代表されるように、自己主張をする個人は周囲からあまり好ましく思われない。自分の意見や要求を表に出さない「どっちでもいい」という言葉は、自己主張をしないという日本の社会規範に沿うものではないだろうか。

こうした社会の中では、人々は他者が何を望んでいるか何を考えているかを推測して相手の意に沿った行動をとることが求められる。東 (e.g., 1991, 1994) は、日本とアメリカの母親のしつけを比較した研究をもとに、日本の子どもは他者の気持ちを推測して行動するようにしつけられていると述べている。「『泣いたらおかしいな』っておばちゃんが笑っている」といった言葉から、現実には笑っていない他人の心の中を推測するようにしむけられるしつけ方 (守屋, 1997) もその一つの例であろう。このように、日本の社会の中では、他者の気持ちを理解し、さらに言い表されない気持ちを察知することが重要であり (東, 1994)、子どもたちはそのための社会的スキルを身につけていく。自己主張をしない日本では察することが人間関係を円滑にするための方略となるのであろう。「どちらがいい?」「どっちでもいい」と対応することは、自分の意図を隠してまず相手に探りを入れるものであり、そして、尋ねられた方も自分の意図ではなく相手の意図を探る必要がある。つまり、「どっちでもいい」は、他者の心を推測しあうという文脈において使用されるものと考えられる。そのため、他者の心を察することが難しい場合、推測しようとしている個人はイライラしたり怒りを感じたりなどの負の感情を持つようになるのであろう。

また、希薄化していると言われる現代の若者の人間関係において「どっちでもいい」という言葉は、表面上だけであるにしても、人間関係を円滑にしていくために都合のよいものなのかもしれない。自分の主張を表に出さず、しかし、友人のことを気にかけているような演出ができるのであろう。

「どっちでもいい」という言葉をめぐって考察を試みたが、最後に、本研究の問題点と今後の方向について述べたい。まず、「どっちでもいい」という言葉が日本に独自のものであるか、あるいは、他の文化に比べて日本で多く使われているものかという点を確認する必要がある。また、本研究の調査対象は女子大学生であったが、細かいところに気づき (伊藤, 1997)、こまやかな気持ちを持つ (柏木, 1974) など、つまり人間関係の中で他者を配慮するということは、女性に期待される役割の一つであると考えられる。したがって、人間関係を円滑にするための「どっちでもいい」が、男性よりも女性において多く使用されるといったことや、同じ使用頻度であっても、その意味合いが男女で異なるといったことも考えられるだろう。このような点についても、今後の検討が必要であろう。さらに、本研究では青年期後期にいる学生を対象として検討を行ったが、「どっちでもいい」という言葉が発達的にいつごろから使われ始め、もっとも使用されるのは何歳ごろかという点も興味深い検討になるであろう。

引用文献

- 東 洋 1991 日本における人間形成 ―日米比較研究より― 小島秀夫 (編) 新・児童心理学講座第14巻 発達と社会・文化・歴史 金子書房 Pp. 241-268.
- 東 洋 1994 日本人のしつけと教育 ―発達の日米比較にもとづいて― 東京大学出版会
- 伊藤裕子 1997 青年期における性役割観の形成 風間書房
- 柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知 (Ⅲ) ―女子学生青年を中心として― 教育心理学研究, 22, 205-215.

Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.

守屋慶子 1997 自己・他者関係の形成 -認識と文化- 柏木恵子・北山忍・東洋(編) 文化心理学 -理論と実証- 東京大学出版会 Pp. 128-149.

Triandis, H. C. 1995 *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press.

(原稿受理1999年9月27日)